

平成 21 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
研究期間：2006～2008  
課題番号：18300313  
研究課題名（和文） ロサンゼルス大都市圏における移民の適応戦略・エスノスケープと都市構造の動態  
研究課題名（英文） Immigrants' Adaptive Strategy, Ethnoscape, and the Dynamics of Urban Structure in the Los Angeles Metropolitan Area  
研究代表者  
矢ヶ崎 典隆（YAGASAKI NORITAKA）  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：30166475

研究成果の概要：多民族多文化社会として知られるアメリカ合衆国ロサンゼルス大都市圏を研究対象として、現地におけるフィールドワークに基づいて、移民の流入と適応戦略、エスニックタウンとエスノスケープ、都市構造の動態を調査研究した。都市構造の変化における移民の役割、そしてダイナミックなロサンゼルス大都市圏の地域像が明らかになった。多民族多文化社会に関する理解を深めるうえで地理学的な基礎研究が重要であることが再認識された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2007年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2008年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
年度			
年度			
総計	15,400,000	4,620,000	20,020,000

研究分野：地理学

科研費の分科・細目：地理学・地理学

キーワード：移民、適応戦略、エスノスケープ、都市構造、ロサンゼルス

## 1. 研究開始当初の背景

近年の日本では、地理学を含めた多様な研究分野において移民に関する研究が盛んになっている。しかし、研究者は個人的な関心に基づいて、独自の研究方法によって、さまざまな地域を対象として研究を進めており、認識を共有した研究グループによる共同研究は少ないのが現状である。また、移民を研究する場合、特定の移民集団を研究対象として、移民を送り出した母国の文脈において分析がなされてきた。例えば、アメリカ合衆国の日系移民は、移民を送り出した近代日本という文脈で研究されることが多かった。しかし、

こうした従来の移民研究では、移民がホスト社会で演じる役割を理解することはできないし、地域としてのホスト社会の動態を分析することもできない。移民・エスニック研究の蓄積が進む中で、地域という枠組みによる考察の欠落が指摘できる。また、近年の都市研究では、移民・エスニック集団を含めた住民の属性や生活文化への関心は依然として限られている。都市は経済活動の空間であると同時に人びとの生活空間でもあり、都市の生活様式と文化には顕著な多様性が認められる。以上のように、移民・エスニック集団と都市研究に関しては、地理学および隣接諸科学において解決すべき課題が多く残され

ている。

## 2. 研究の目的

現代の世界において多民族多文化の共生は人類にとって重要な課題である。多民族多文化の共生のあり方を検討するための前提となるのが、詳細な事例研究の蓄積である。地理学は、移民社会とホスト社会が作り出す地域のダイナミックな現実を地域という文脈において説明することによって、人類の持続的発展と多民族多文化の共生に貢献することができる。

このような前提の下で、私たちは、多民族多文化社会のグローバルな比較研究を最終的な目的として、3つの研究のステージ（単一の大都市圏スケールの研究、国家スケールの研究、グローバルスケールの比較研究）を設定した。第一ステージである本研究は、多民族多文化社会として知られるアメリカ合衆国を取り上げ、多民族多文化現象がもっとも顕著な形で表出しているロサンゼルス大都市圏を研究対象とした。

さまざまな移民集団に光を当て、それらの集団がホスト社会と互いに相互作用し、ホスト社会という文脈に経済的ニッチと空間的ニッチを築いてきたのかについて、都市構造の変化という地域的枠組みにおいて研究する。そして、エスニックモザイクとしてのロサンゼルス大都市圏の特徴を明らかにする。具体的には、生活と経済活動の場としての大都市圏の都市構造、それぞれの移民集団が採用した適応戦略、移民社会とホスト社会の動的関係、その結果として表出したエスノスケープについて、地理学の観点から研究することを目的とした。

本研究には、地理学の異なる分野で業績を有する8名の研究者が参加した。研究代表者、研究分担者、連携研究者は、アメリカ合衆国、カナダ、ラテンアメリカ諸国、ヨーロッパ諸国、そして日本において、移民・エスニック集団、都市構造、人口問題に関して研究を続けてきた実績を持つ。上記の研究目的を達成するために最適な研究チームを結成することができた。

## 3. 研究の方法

ロサンゼルス大都市圏という多民族多文化社会を研究するために、具体的には次の3つの調査課題を設定し、現地におけるフィールドワークを実施した。

(1) ロサンゼルス大都市圏の形成と都市構造の変化に関する調査研究：都市化・工業化のプロセスと大都市圏の形成過程、人口の流入・流出パターン、産業構造の変化とインナーシティ化・郊外化の進展、郊外型のビジネ

スパーク・ショッピングモール・工業団地の立地動向、インナーシティの再生過程、人種民族による住み分けとエスニックタウン、ゲート付閉鎖型住宅地に代表されるような都市における住み方について検討した。

(2) ヒスパニック・アジア系・ヨーロッパ系移民に関する調査研究：移民集団の適応戦略を就業構造・居住空間・民族組織に着目して明らかにした。移民集団の住み分けを空間的に把握し、エスノスケープの景観的特徴及びエスノスケープが形成・維持されるメカニズムを検討した。新移民の流入と移民の高齢化に着目して、移民社会の持続性について検討した。

(3) エスニックモザイク都市としてのロサンゼルス大都市圏の地理学的特徴：上記の調査結果に基づいて、多民族多文化都市としてのロサンゼルス大都市圏の特徴を地理学的に考察し、都市構造モデルを検討した。

## 4. 研究成果

(1) ロサンゼルス大都市圏を含む南カリフォルニアにおいて、18世紀から19世紀における都市の起源と発達を検討することによって、都市化のプロセスの概要が明らかになった。また、南カリフォルニアの都市化の進行と地域変化について、南北アメリカにおけるヨーロッパ文化圏の拡大と3つの経済文化地域の形成および変化の観点から解釈することができた。

(2) アメリカ時代になってからのロサンゼルス都市構造の変化について、アメリカ都市の萌芽期（1848～1869年）、健康ユートピアの発展期（1870～1899年）、総合的工業都市の形成期（1900～1939年）、工業発展と郊外化の進展期（1940～1969年）、産業構造の変化と都市の分裂化の進行期（1970年以降）に時期区分して検討し、都市構造の変化を模式図で示すことができた。また、移民の流入に伴う多民族多文化化が進行した1970年代以降について、エスニック現象を都市構造に位置づけることができた。

(3) 合衆国2000センサスに基づいたロサンゼルス大都市圏の人種民族地図帳を用いて、住み分けパターン、エスニックエンクレーブの分布と意義について確認することができた。また、ロサンゼルスおよび他のアメリカ合衆国の大都市圏を対象として、エスニック集団ごとの人口動態や居住地移動に関する近年の研究成果を検討した。ロサンゼルス大都市圏ではエスニック集団の郊外化の進展や住み分けの弱まりが認識された。エスニック集団の居住地がインナーシティから郊外の良好な住宅地へと拡散しつつあり、インナーシティにおける居住が自主的な選択の結果であることが少なくないことから、旧来の

都市内居住分化モデルの見直しが必要であることが明らかになった。

(4) 日系移民社会の伝統的な中心地であるリトルトーキョーと周辺地域を対象として、土地利用と業種構成、エスニック景観の形成過程、日系社会の社会的活動について検討した。日本の景気低迷や日系企業・日本人観光客の減少により、非日系経営店舗や空き店舗が増加し、商業活動の変化や停滞がみられる。一方、市のコミュニティ再生計画によるエスニックシンボルの創出、都心再開発計画、地下鉄路線化施設に伴う新たな日系コミュニティ施設の建設が開始された。エスニックタイとして存在してきたリトルトーキョーの役割や意味が大きく変容しつつあることが明らかになった。

(5) 第二次世界大戦後の日系社会と日系文化継承の変化および特徴について、日系職業団体として最も規模が大きい南加庭園業協会と日系ガーデナーを中心に調査を行った。その結果、当協会および日系ガーデナーは、エスニック景観の創出と文化継承・普及に大きな役割を果たしたと同時に、日系社会において経済・社会・文化的な維持機能を担ってきたことが明らかになった。

(6) 日系社会では日系移民の高齢化が急速に進行しており、エスニック集団の高齢化を検討する際に重要な事例となる。リトルトーキョーを中心として日系高齢者を対象とする団体・組織を調査した結果、日系高齢者の多様な活動のタイプと活動の場を提供するコミュニティセンターの存在、そしてそれらの団体・組織の活動の空間的広がりが増え、明らかになった。また、日系社会の郊外化が進展する中で、リトルトーキョーを拠点として活動する組織の役割ならびにこの伝統的なエスニックタウンの重要性が再認識された。

(7) 中国系はロサンゼルス大都市圏において古くから存在するアジア系集団である。ロサンゼルス市中心部のオールドチャイナタウンと郊外のニューチャイナタウンには大きな差異が存在することが明らかになった。オールドチャイナタウンではインドシナ系華人の流入が著しい。一方、モンレーパーク、そしてさらに東方の東サンゲイブリエルバレー方面には、富裕層の華人の居住地が形成されている。中国系の継続した流入によってもたらされる、チャイナタウンのダイナミックな変化と形成が明らかになった。

(8) ヨーロッパ系の中でドイツ系は大きな人口を有している。移民集団としてのドイツ系住民に着目すると、高いモビリティと高い社会経済的な水準のゆえに、集住傾向はほとんどみられない。ドイツ系住民は、所得水準や教育水準によって居住地を選択する。一方、近年では伝統文化や建築景観などを用いた自己アピールを行うグループも現れ、エスニ

ック集団としてのアイデンティティを意識した動きもみられることがわかった。

(9) ロサンゼルス大都市圏の都市構造と移民社会をヨーロッパの事例と比較した。その結果、モータリゼーションの影響、郊外化による都心部の空洞化に伴う貧困層の集積、行政による弱い規制、歴史的ランドマークの存在などの点において、ロサンゼルスはドイツの都市構造・移民社会とは異なることが明らかになった。そして、国際的な比較研究の重要性が示唆された。

(10) ヒスパニックは特定地域に集住する傾向が強く、エスニックエンクレーブにおいては出身地のメキシコの都市景観を再生産する。この景観は一般に住民のエスニックシティの表象として無意識的に生産されるが、意図的に生産され修景されたメキシコ系景観も存在する。オルベラ街を中心とするエル・プエブロ歴史地区の景観分析を通じて、この空間がロサンゼルス都市空間とエスノスケープを論じるうえで極めて重要であることが明らかになった。

(11) ロサンゼルス南郊の土地利用変化と都市化の進展を把握するために、ガーデナ市とトーランス市を対象として調査を行った。空中写真を用いた土地利用の変化と聞き取り調査により、住宅化・工業化の進展、日系の花植木生産者の減少と農地の残存形態を検討した。高圧送電線下に帯状に残存する鉢物生産という特異な都市景観の存在とその存立条件が明らかになった。

(12) ロサンゼルス大都市圏の南東部に位置するアルテジア市を対象として、土地利用の変化とエスニック社会の形成について検討した。近郊農村として発展したアルテジア市は、第二次世界大戦前には酪農業の中心地となった。しかし、1950年代からの都市化に伴って酪農業は衰退し、住宅、工場、流通施設が建設された。パイオニア街を事例として詳細な土地利用変化を検討した結果、酪農地帯が、リトルインディアと呼ばれるインド人商店街に変化した詳細な過程が明らかになった。そこには、過去の土地利用の痕跡とエスニック集団の居住が認められ、多文化社会が構成されていることも明らかになった。

(13) ロサンゼルス大都市圏の構造を具体的に把握するために、大型ショッピングセンターの立地展開を検討した。1940年代後半に最初のショッピングセンターが建設してから、都市化・郊外化の進展や生活様式の変化を反映して、大型ショッピングセンターが発展したプロセスが明らかになった。61か所のショッピングセンターについて、都市型、都市再開発型、公害型、超郊外型に分類し、店舗構成の地域性と、特定の店舗を指標として用いることができる。都市構造を検討するうえで、ショッピングセンターが重要な要素となる

ことが確認できた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 斎藤 功 2009. インペリアルバレーにおけるヒツジのアルファルファ畑放牧. 立教大学観光学部紀要, 11: 25-38. 査読無
- ② 矢ヶ崎典隆 2008. アメリカ合衆国の地域区分と地誌の考え方. 歴史と地理, 619, 33-41. 査読無
- ③ 矢ヶ崎典隆 2008. 南北アメリカ研究と文化地理学—3つの経済文化地域の設定と地域変化に関する試論—. 地理空間, 1(1): 1-31. 査読有
- ④ 矢ヶ崎典隆 2008. 都市構造からみたアメリカ合衆国の地理. 新地理, 56(1): 38-43. 査読無
- ⑤ Ishikawa, Y. 2008. Progress in Japanese population geography: Retrospect and prospect. *Geographical Review of Japan*, 81(5): 247-261. 査読有
- ⑥ Yagasaki, N. 2008. Origins of cities and urbanization in nineteenth-century southern California: Regional changes in the context of three economic-cultural regions of the Americas. *The Japanese Journal of American Studies*, 19, 197-219. 査読有
- ⑦ Yagasaki, N. 2007. Immigration to the United States. In *Global Perspectives on the United States: Issues and ideas shaping international relations*, ed. D. Levinson and K. Christensen, 167-170, Berkshire Publishing Group (Great Barrington, USA). 査読有
- ⑧ 矢ヶ崎典隆 2007. ビデオ教材制作による地誌教育の試み. 学芸地理, 62: 1-12. 査読無
- ⑨ 矢ヶ崎典隆 2006. アメリカ合衆国の地域性と地域区分. 新地理, 54(3): 15-32. 査読有
- ⑩ 石井久生 2006. ロサンゼルスのはスパニック. 2006年9月号, 34-36, 査読無.

[学会発表] (計 7 件)

- ① 矢ヶ崎典隆・佐藤紘司: ロサンゼルス大都市圏におけるショッピングセンターと都市構造. 日本地理教育学会大会, 2008年7月21日, 三重大学.
- ② 矢ヶ崎典隆: 移民研究の原点—新たな研究フロンティアへむけて—「アメリカの移民・エスニック研究 (地理学). 日本移民学会第18回年次大会, 2008年6月29日, 東京学芸大学.
- ③ 加賀美雅弘: 移民研究の視点—新たな研究

フロンティアへむけて—「ヨーロッパの移民・エスニック研究 (地理学). 日本移民学会第18回年次大会, 2008年6月29日, 東京学芸大学.

- ④ 矢ヶ崎典隆: ロサンゼルス大都市圏の都市構造と境界景観. アメリカ学会第42回年次大会, 2008年6月1日, 同志社大学.
- ⑤ 加賀美雅弘: ヨーロッパにおけるエスニック集団理解のための一視点. 日本地理教育学会第57回大会, 2007年8月5日, 関西大学.
- ⑥ 加賀美雅弘: ヨーロッパの縮図としてのドイツ—都市に着目した教材化の試み—. 日本地理教育学会6月例会, 2007年6月30日, 東京学芸大学.
- ⑦ 山下清海: エスニックタウン研究の課題と地理学. 日本地理学会秋季学術大会, 2007年3月21日, 東洋大学.

[図書] (計 2 件)

- ① 山下清海編 2008. 『エスニック・ワールド—世界と日本のエスニック社会』明石書店, 257頁.
- ② 矢ヶ崎典隆・加賀美雅弘・古田悦造編 2007. 『地誌学概論』朝倉書店, 160頁.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

矢ヶ崎 典隆 (YAGASAKI NORITAKA)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号: 30166475

### (2) 研究分担者

斎藤 功 (SAITO ISAO)  
長野大学・環境ツーリズム学部・教授  
研究者番号: 90006586

山下 清海 (YAMASHITA KIYOMI)  
筑波大学・生命環境科学研究科・教授  
研究者番号: 00166662

石川 義孝 (ISHIKAWA YOSHITAKA)  
京都大学・文学研究科・教授  
研究者番号: 30115787

石井 久生 (ISHII HISAO)  
共立女子大学・国際学部・准教授  
研究者番号: 70272127

平井 誠 (HIRAI MAKOTO)  
神奈川大学・人間科学部・准教授  
研究者番号: 40367248

(3)連携研究者

加賀美 雅弘 (KAGAMI MASAHIRO)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：60185709

椿 真智子 (TSUBAKI MACHIKO)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80236934